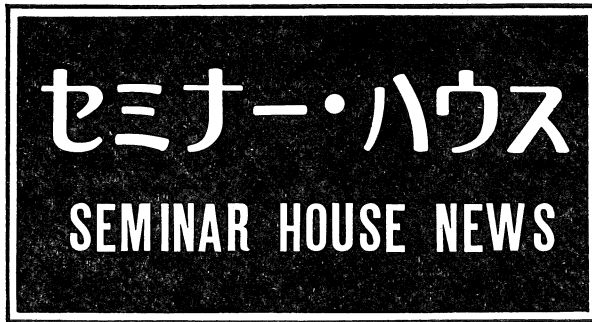


第32号 20円

昭和48年10月25日

内容

- 現代世界とナショナリズム… 1
- 国際協力会員校制をつくる… 2
- 国際色も豊かな  
セミナー・ハウス… 3
- 夏のセミナー・ハウス… 4
- 海外だより(2)… 4
- 千人会… 5
- 第59・60・61回  
大学共同セミナー… 6,7
- 業務通信・利用状況… 8



発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

《所在地》

東京都八王子市下柚木  
電話 0426-76-8511~3

《東京事務所》

東京都中央区日本橋本町3の3  
三井銀行本町支店ビル5階  
電話 東京(241)3961  
振替口座 東京74590番

編集・発行人 飯田宗一郎  
製作 中央公論事業出版

はげしく揺れ動く国際経済関係の動態をナショナリズムの統一的观点から分析し、ヨーロッパおよび非ヨーロッパのナショナリズムが当面している現代世界の具体的な問題解決をめぐる、どのような相互の関係調整に苦闘しているかを明らかにしていきたい。

一般に近代的概念におけるナショナリズムとは、民族に基礎をおいた国家を至上のものと考え、このような民族国家を政治的、経済的、文化的な三つの側面の統一として、すなわち近代的な国民国家、国民経済、国民文化の全体的統一として形成・発展せしめようとする理念と運動の総体であるといえることができる。

このような意味でのナショナリズムの原型はヨーロッパに発生し、その展開過程において二段階的發展を遂げ、一九世紀後半に古典的完成をみたといわれる。二段階的發展というのは、一五、六世紀から一八世紀後半までの政治的には絶対王制、経済的にはマーカント伊利ズムとして「集権的統一」の段階、次にフランス革命と産業革命を媒介として、政治的には近代民主制、経済的には産業自由主義として「民主的自由」の段階という二つの体制と段階を経て、はじめてヨーロッパのナショナリズムは自己を確立した。

しかし、ここで注意しなければならぬことは、ヨーロッパのナショナリズムにおける「国民化」

の原理は、対内的には、「産業化」の原理が「民主化」の原理と相結んで展開したのであるが、対外的には、産業化原理の帰結は、非ヨーロッパ世界の「植民地化」を不可避の要件とした。こうしてヨーロッパ・ナショナリズムの進展は、一九世紀末葉より二〇世紀前半にかけて、植民地化闘争をめぐって二つの大戦をひき起こし、一九世紀の国際関係秩序の自己破壊をもたらししたのである。

こうして、古いヨーロッパ・ナショナリズムは、第二次大戦後、この教訓の中から「ヨーロッパ統合」の新理念のもとに、自国中心の狭いナショナリズムを超えた、いわばトランス・ナショナリズムへの形態変化を遂げようとしている。西欧六カ国をもって発足したEECが、本年一月よりイギリスほか二カ国を加えた拡大EECに発展し、米ソを超える巨大なヨーロッパ共同体になったことは、ナショナリズムの形態変化の視点からみて、世界的な出来事だといわねばならない。ECの対内的・対外的政策の今後のあり方を、新しい国際関係秩序の形成というコンテクストの中で、評価検討しなければならぬ。



新しい国際関係秩序を求めて  
現代世界とナショナリズム

一橋大学  
名誉教授 板垣 與一

ればならない。他方、非ヨーロッパ世界では、植民地から独立した新興諸国家のナショナリズムは、それぞれの自主的国民化と自立的産業化の達成をめざして、西欧先進諸国中心の既存の国際体制に挑戦している。戦後の急速な技術革新のもとで、先進国と後進国とのあいだに存在する経済的不平等とその継続的拡大の傾向は、ここに必然的に「南北問題」を登場せしめた。

南北問題の本質をどのように理解すべきか。この用語に含蓄された意味内容は複雑多岐であって必ずしも一義的に明瞭とはいえないが、私の理解では少なくとも次の四つのポイントを念頭におくことが肝要と思われる。

第一に、南北問題は開発途上国と呼ばれている後進国の広義的發展(政治的、経済的、文化的)それ自身が主題であること。第二に後進国の経済發展の問題は、すでに発展を遂げた先進国との依存と対抗というダイナミックな相互作用のなかでの發展の問題であること。第三に、先進国と後進国、富める国と貧しい国という所得水準と技術水準の絶対的格差のある二

種類の国家群が、同時に並存する国際体制の枠組のなかでは、市場諸力の自由な活動が許されているかぎり、現存する国際的経済不平等は、ますます拡大する傾向をもつこと。第四に、そして最も重要なことは、現代の後進国はいずれもかつて植民地、半植民地、属領であったいわゆる「植民地的」後進国であり、したがってこれらのナショナリズムは、この国際間の経済的不平等とその拡大傾向を、やむをえない運命として甘受するのでなく、そもそもかれらをこのような状態におとし入れた重大な責任の一半は、当然にかつての宗主国であった西欧先進諸国側が負うべきものであることを意識し、現存の硬直的な国際体制の打破とよりいっそうの機会均等を要求する「心理的、政治的」事実を直視すること、これである。こうして南北問題は先進国と後進国とのたんなる経済的次元での関係調整であるばかりでなく、同時に政治的次元での緊張克服の問題でなければならない。

南北問題の根底には、後進国の根強い「脱植民地化」ナショナリズムがはたらいている。六〇年代の貿易・開発局面から、七〇年代の資源・エネルギー局面へのナショナリズムの急展開は、多国籍企業と対決しつつ、現存の貿易・通貨・資源秩序の再編成を指向する。(第58回大学共同セミナー「全体講義の概要。文責編集者」)

October 2, 1973

Dear Mr. Iida:

Both the students and I want to thank you for the wonderful month we spent at Daigaku Seminar House and tell you how much we enjoyed getting to know you and the rest of the wonderful staff. We also want to express our deepest thanks to you and the rest of the Board of Directors for the great honor granted us in becoming the first International Member of Daigaku Seminar House. I have already written this wonderful news to Colgate University and we all appreciate it more than words can say. I know that Dr. Bash will express his added appreciation when you reach the Colgate campus.

Sincerely yours,

Thomas E. Swann

Thomas E. Swann  
Japan Studies Director  
Colgate University

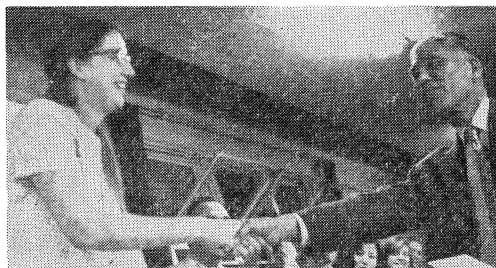
## 国際協力会員校制をつくる

“International Member”として

第1号はコルゲート大学

国際交流へも門戸を開く

九月二十七日の理事会は外国大学が当セミナー・ハウスを利用する



コルゲート大学スワン教授夫人から国際協力会員校加入のお礼の握手を受ける飯田専務理事（お別れのパーティにて）

ことが多くなりつつある現状にかんがみ、入会申込みがあった場合は積極的に歓迎しようということになったが、日本の大学と比べ利用方法、時期も異なるので正式の会員校とすることは適当でないという結論になり、準会員のような別ワクの制度を作り、国際協力会員校として、アメリカに限らずどの国からでもよいことにした。英語名は “International Member” と呼ぶことにする。

なお年会費については、利用回数、人数もひじょうに限られているので、日本の会員校の基本会費（現在年額一五万円）だけとすることとし、International Member of the House の制度を設けることにした。

早くも第一号としてアメリカ、ニューヨーク州のコルゲート大学から入会の申出があり、折柄セミナー・ハウスに約一ヵ月滞在中であった同大学のスワン教授夫妻と学生一五名を主客とした送別パーティを九月二十八日の夕食時に開催したので、その席上、成蹊、東工大、日大、東大、津田塾大など多数の学生の前で、飯田専務理事からコルゲート大学の入会を発表された。会場の拍手の中で、祝意が表された。セミナー・ハウスは制度的にも国際交流の第一歩を踏み出したわけである。

いよいよ開かれた大学の姿勢を世界に向けたことは、開館八年目の特筆すべき事項である。

### 感謝報告

開館五周年および七周年記念募金  
大きな成果をあげて終幕

11月10日に大蔵省へ提出

#### 募金総額

- 一五五、三〇〇、五三四円
- 法人寄付金（五八件）
- 一二九、七〇〇、六六六円
- 個人寄付金（五五人）
- 七七四、三八七円
- 文部省補助金
- 二〇、〇〇〇、〇〇〇円
- 日本自転車振興会
- 一、五五〇、〇〇〇円
- 預金金利
- 三二七五、四八一円
- 寄付金の使途
- 長期研修館新築
- 五八、三二五、三八〇円
- 敷地拡張土地買収
- 八一、九八四、六五九円
- よろこび広場新設
- 一、四五四、九二五円
- テニスコート改装
- 三、二〇五、〇〇〇円
- 差引現在高
- 一〇、三三〇、五七〇円

昭和四五年四月二八日大蔵省告示第五一号をもって指定寄付の許可をうけ開始した開館五周年記念募金は、増田四郎理事長の積極的な行脚のお蔭で初年度に早くも七、六〇九万五、〇七三円を集め、大きな成果をあげることができたが、やがて昭和四七年に開館七周年を迎えるに至ったので、この募

金は七周年記念募金と発展したものである。

目標額を一億八、〇〇〇万円として募金を行ない、前記のように指定寄付期間中、一億五、五〇〇万円を集めることができた。予定した記念事業の大半を終了したのであるが、残高一、〇三三万円のうち、一月一日に竣工祝いをする野外集会場新設工事のために一、二二〇万を必要とするので、募金目標には達しなかったが、記念すべき諸施設を完成し、開館五周年を意義づけ、さらに前進して開館七周年の歴史に重みを加えることができた。

三井銀行相談役佐藤喜一郎氏はいつものごとくわがことのように尽力下され、増田理事長もよく飯田専務理事と歩調を合わせられたが、やがて理事長を退任されたので、第三年目の終盤戦は飯田専務理事が専心努力し、一、八六〇万を達成した。

特筆すべきことは昭和四五年年度に三菱グループが一、八〇〇万円を、同四六年度には三井グループが一、五〇〇万円を寄付されたことである。それぞれのところに当セミナー・ハウスを支持される応援者があったことを改めて感謝しなければならぬ。

# 国際色も豊かなセミナー・ハウス

夏は、例年外国の学生がセミナー・ハウスの丘にやってくるが、今年とはりわけ国際色豊かなものがあつた。おもな利用グループを拾ってみても、国際学生協会 (ISA)、日米学生会議 (JASC)、英語教育協議会 (ELEC)、コルゲート大

学日本研究グループなどが相次いで。これらの外国人の中には、日本のさまざまな面を深くみつめ日本をよりよく理解したいと積極的な努力をしている人たちが多くいようである。以下、二、三のグループと参加者の感想などを紹介してみたい。

## コルゲート大学

### 日本研究グループ

アメリカのニューヨーク州コルゲート大学からは、昨年に引き続きこの夏も日本研究グループが訪れた。八月二十九日羽田に着くなり空港バスでこの丘に直行したのは、同大学三、四年を主力とする男女一五名の学生で、日本語も流ちょうな指導教授スワン夫妻が同行、こちらで日本人講師一名がこれに加わつた。

同大学は、毎年同じような研究グループを日本のほか、ドイツ、フランス、イギリス、イスラエル、インドなどに送っているが、その目的はそれぞれ五カ月にわたる生活体験を通じて、その国の人の心を理解し視野を広めようというもので、同大学の一般教養の一課程として単位が取得できるという。

The natural atmosphere of Daigaku Seminar House was very conducive to our study of the Japanese language. We had an opportunity to utilize the facilities both for academic pursuits and also in becoming aware of the life style of our Japanese counterparts, in meeting and socializing with Japanese students. The Seminar House provided us with a unique opportunity both to learn and to make use of our stay in increasing our understanding of Japanese life.

September 30, 1973

Janet Wall

日本研究グループがセミナー・ハウスで過ごす九月三〇日までの約一カ月間は、日本語の集中的な研修と日本の生活と文化へのオリ

エンターションにあてられる。それは彼らの日本体験へのいわば導入部であり、同時に滞日の成果を決定づける重要な準備期間となるわけであるが、別掲の感想のようにセミナー・ハウスはそのための格好な場であると喜ばれている。

## 第25回日米学生会議

(JASC)

この会議の歴史は戦前に遡り、その第一回は一九三四年に東京で開催されている。当時、両国の関係の前途を憂慮し、日本政府が両国の友好促進のために十分な努力を尽くしていないと感じた日本人学生の有志が、民間ベースのコミュニケーションの重要性を痛感し、自主的にこの会議を実現させた。以来、企画・運営の一切が学生自身の手によってなされるがこの会議の特色である。開催地はアメリカと日本と一年おきに変わるが、セミナー・ハウスが日本での会議の場所となつたのは一九六九年以来、今回が三度目である。さて、今回の会期は七月三一日から八月九日までの一〇日間。日本代表四一人、アメリカ側四〇人。全体が政治、経済、社会、教育、文化などのグループに分かれて論議や交歓が進められた。江藤淳氏や国弘正雄氏などが講師として招かれ、日米関係の歴史的背景

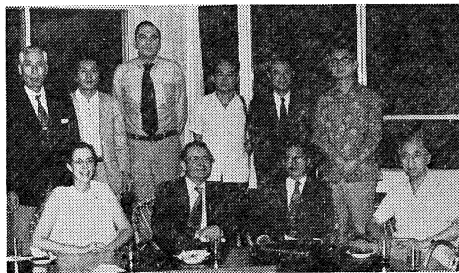
や異なる文化間でのコミュニケーションの問題点などがとりあげられた。「フィールド・ワーク」と称する外出には、通産省や経済企

## ●新しい試み・・・国際問題を語る集い イギリスのウィリアム・バートン氏を囲む会

フレンズ・センター主事 小堀 孟氏

【期日】昭和四八年九月一二日  
【出席者】  
成蹊大学教授 宇野重昭氏  
東京大学教授 関 寛治氏  
マラーヤ大学講師 ゴ・チェンテック氏

アジア経済研究所所員 矢吹 晋氏  
アジア経済研究所客員研究員 黄 枝連氏  
コルゲート大学教授 トーマス・スワン氏  
同夫人バーバラ・スワン氏



前左からスワン夫人、バートン、関、小堀の各氏  
後列左から飯田、矢吹、スワン、黄、宇野、ゴの各氏

来日中の外国の指導的人物や学者を招き、それぞれの領域における日本人側専門家と自由な意見の交換を行なうために機会を提供し、ひいては国際的な相互理解促進の一助たんとすることは、セミナー・ハウスが折りにふれてなしている意義ある活動の一つである。ウィリアム・バートン氏は、終始国際間の緊張緩和を求め、かつて六たびソ連を、また一九六四年には中国大陸を訪れたイギリス人である。今度の日本訪問はオーストラリアでのフレンズ世界会議の帰途であったが、中国と今後の国際環境の変化の方向などについて共通の関心をもつ人々との話し合いを望んでいることを知り、同氏を迎えて晚餐と懇談の会を開いた。席上では、新しいアジアにおける中国の影響力、日本の東南アジアへの経済的進出など、バートン氏の訪中時の印象などを交え、終始友好的な雰囲気の中で忌憚のない意見の交換がなされた。

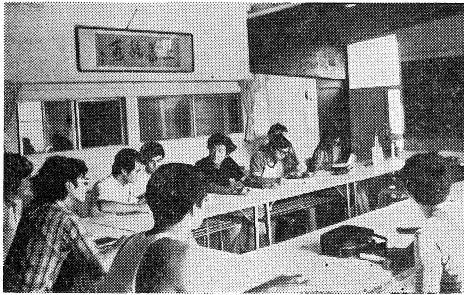
## バラエティに富む利用者 夏のセミナー・ハウス、うれしい多忙

新しい人生への希望と期待をもった新入生たちのオリエンテーションが四、五、六月とこのキャンパスを彩った後、七、八月の夏休みは、学会の利用、外人学生の来館などセミナー・ハウス利用のピーク時である。六、九月の利用と行事の特徴は、そのバラエティの豊かさである。

### 一橋大学夏季学外ゼミ

#### 一、二年生を対象に

一橋大学は、例年、当ハウスを利用して九月初旬に、一、二年生を対象とした教養ゼミを行なっている。同大学は、教養課程が小平



暑さにもめげず—依光ゼミ(一橋大学)

分校、専門課程が本部と分かれており、一、二年の学生は専門課程担当の先生方との交流が少ないので、二泊三日の日程のもとに、先生方との人格的交流と三、四年の演習や他の専門科目の研究をいかにして進めるべきかを討論することを目的として行なわれる。

今回は、当ハウスとは千人会会員や共同セミナーの講師として縁の深い深沢宏、竹内啓一先生をはじめ六人の先生が参加され、充実したゼミナールが行なわれた。

### 東京大学・プロット研究会

#### 七大学の先生方も参加

同会は、現在ドイツの最上の思想家プロットホの研究と翻訳のための共同作業を長年にわたってつづけてきた研究会である。今回は、七月七、八日にかけて東大、独協大、慶応大、横浜国大、一橋大、玉川大、宇都宮大の先生方が参加して行なわれたが、いつも忙しい諸先生が久しぶりに顔を合わせられたせいか、食事時のテーブルはひじょうに楽しそうであった。

### 研究会も次々に

この夏休みを利用しての研究会

七月五日 パーミンガムにて  
いよいよウッドブルク・カレッジ最後の週が近づきました。どうか論文をまとめることができました。今日、パーミンガム大学での最後のJournalをうけ、ダルトン教授からOutillageをいただくことができました。

七月三〇日 タンザニヤにて  
こちらは冬なので、東京よりずっと涼しく、今日などは肌寒いくらいです。タンザニヤでは人口二千人程の中部のイファカラという町で、ルーテル教会の宣教活動をしているドイツ人の友人のお世話になっていきます。近くにはカソリックの病院や手工芸を指導しているWork Shopなどがあります。

人々の生活は非常に貧しく土間のような処に寝起きしています。タンザニヤはアフリカの社会主義を提唱している指導的な国で、最近中国の援助で鉄道の建設を進めており、市場には中国産の日用雑貨が並んでいます。

八月二八日 ケニヤにて  
当地で開催中の友会徒の東アフリカ年会に出席しています。私は初日に議長から紹介され、

日本代表のような形になってしまいい、千人くらいの会衆の前で挨拶をするのはめになりました。人々の表情は明るく、道を歩いていても握手を求められることが多く、人なつこく親切です。

会場は青空の下、朝一〇時近くになると、急に太陽の日ざしが強くなります。私もすっかり日焼けして笑談にもう日本人でなくアフリカ人になったといわれます。

### 海外だより

(2)

#### 飯田能子

一〇月七日チュービンゲンより  
慶応大学の村井実先生のご紹介でチュービンゲンで学生寮の責任者であり、学生の世話役であるラウアー氏を訪ね、二日から四日まですっかりお世話になりました。ここは大学経営の寮ではないので七〇人程の共同体ということに重点を置き、入寮希望者は面接によってその趣旨に積極的に共鳴する者が選ばれます。運営の大部分に学生が参加しており、研究会や討

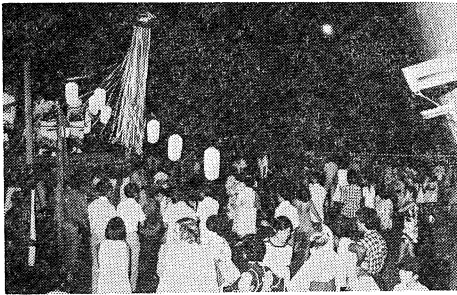
は数多いが、中でもスライドを用いた東京慈恵会医科大学付属病院小児科の先生方による臨床報告、オーバー・ヘッド・プロジェクトターなどの機材類を持ち込み、若手研究者を中心とした一三〇名の参加による東京大学医科学研究所主

催の毒素シンポジウムなどが目立った。ここでは当ハウスがこの五月に新しく設備した大型スクリーンが大活躍。  
また、当ハウスとすつかり顔なじみになった上智大の鶴見和子先生を中心とした「近代化論再検討

研究会」やセミナー・ハウスとは関係の深い日本女子大の一番ヶ瀬康子先生が主催する「現代生活研究会」など猛暑の中でのハード・スケジュールの研究会が相次いでいた。

論会を活発に組織しています。ドイツにはそれなりの制度のよさがあって、イギリスのそれと比較して、どちらがよいというようなことは簡単にいえませんが、やはり学生数の増加は、もう避けられない問題のようで、よく日本ではドイツの大学は講義が基本で、ある教授の何の講義に出ることがほこりというようにいわれていますが、それももう昔のこと、どんな講義もゼミナールがバックアップしているわけで、そのゼミナールのやりくりには矢張り頭が痛いようです。

セミナー・ハウスとは縁の深いチュービンゲン大学の学生局長ズベイト氏を訪ねました。彼は、あいにく不在でしたが、秘書でもあられる奥様の運転で、建築中の学生村を案内してもらいました。一〇月中に完成すると一万二千人の学生が泊まれるそうで、まるで団地のように大小の建物と並んでいいます。ここでも月額一、二〇マルクの家賃をめぐって学生とのトラブルがあるようです。(在英、大学セミナー・ハウス職員)



夏の風物詩——盆踊り

◆ 日本大学駿河台病院の職員研修  
 研修は二度にわたって行なわれ、途中でコルゲート大学生の送別会に花をそえる一幕もあった。幹事は「これまで利用しなかったのが残念だが、これからはどんどん利用したい」とたいへんな意気込みよう。

楽しい行事

◆ 当ハウスでは、大体月一回くらい、利用者間の交流を目的とした交歓会を開いているが、季節色の強い催しを二つほど紹介したい。

盆踊り

毎年、外国人利用者が一番多い日を選び、地元の婦人・青年の協力を得て行なわれる。今年も、来館中の日米学生会議の来館を機会

に八月七日開催した。花火が上り、太鼓のバチもさえる中を踊りの輪が広がる。熱心に手をとり拍子を教える近隣のおばあさんとギョウチない手振りのアメリカの学生の交歓風景は、近年この丘の名物ともなった夏の夜の風物詩である。

観月

九月二日、ススキの穂が出揃い、萩の花の見事なセミナーの丘を目の当りに見て、教師館の屋上で月見の宴を開いた。毎月の交歓

千人会

新しく  
会員となられた方々

二三名(昭和48年9月末現在)  
 現在会員八三一名

- 大学人 六五五人
- 社会人 一七六人
- 第21回報告(申込順)
- B 専修大学教授 山本 満殿
- B 玉川大学教授 若槻泰雄殿
- B 千葉商科大学教授 小竹豊治殿
- C 東京理科大学助教 木村一嘉殿
- C 立教大学 江河 徹殿
- C 東京大学助教 岡野行秀殿
- C 武蔵大学教授 伊能 敬殿
- C 高崎経済大学助教 三浦永光殿
- C 南多摩医師会長 若林文修殿
- C 慶応義塾大学教授 村松 暎殿
- B 早稲田大学教授 中村浩三殿

会と趣をかえて野外で行なうのも一興という提案のもとに行なわれたのである。この観月の宴はいかにもセミナー・ハウスらしく月見だんごならぬ月見お芋で楽しく一ときを過ごした。

◆ 意外に近いセミナー・ハウス利用者感想にきく  
 八王子というと、遠いところだ、不便なところだと思わらしい

- B 東京都立大学助教 関口 晃殿
- B 慶応義塾大学教授 石坂 巖殿
- C 武蔵大学教授 横山定雄殿
- C 陸上自衛隊 千葉正美殿
- B 東京外国語大学助教 中嶋嶺雄殿
- B ダイキン工業(株)顧問 原納又夫殿
- C 一橋大学助教 富沢賢治殿
- C 日野自動車工業(株)VA室 千葉岑雄殿
- A 学習院大学教授 近藤正夫殿
- C 慶応義塾大学教授 澤本孝久殿
- B 自営業(輸出) 西倉勇吉殿

会費  
ありがとうございます

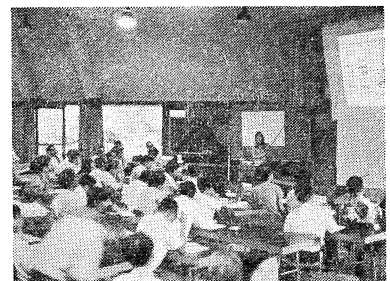
昭和48年7~9月(敬称略)  
 藤原鎮男、鈴木成文、手出彦仁、森川芳彦、黒田孝郎、K・M、小

が、一度セミナーの丘にこられた人は、都心から一時間弱でこんなすばらしい自然の中に生活できるのかと、異口同音の感想を述べる。

◆ 学会や大学職員の利用率も、最近上昇しているが、まだまだ知らない方が多い。  
 多くの方がこの自然の中で研修されるよう心からお待ち申し上げます。

- 林正一、龜山貞登、小澤婦貴子、藤井 隆、大畑篤四郎、新井勝紘、総山孝雄、山本武彦、長尾龍一、原田行男、色川大吉、太田善廣、山本芳夫、関田寛雄、児玉久雄、村松 暎、佐藤 豪、木村増三、中村浩三、市川惇信、坂田道太、木村晴雄、花島重春、中村正久、平井 久、野田一夫、高村象平、宮川俊彦、藤岡通夫、三宅 彰、澤本孝久、藤田淑子、北野弘久、室 俊司、有賀 弘、柴田愛子、浅川 淳、鈴木忠義、内ヶ崎賢五郎、小田切松義、中村英勝、田中庄蔵、稲垣 寛、栗原照子、飯吉厚夫、伊能 敬、鈴木 守、森川和久、吉屋野正伍、島岡 丘、堀江忠男、武藤英輔、後藤米夫、谷俊司、平野健一郎、島袋嘉昌、森口繁一、原 豊、西村善四郎、岡野行秀、押田勇雄、小川圭治、武澤信一、福山仙樹、朽津耕三、増田茂樹、下田 弘、藤永光之

千人会



いろいろな機材を持ち込んでの発表風景——東京大学医科学研究所主催の毒素シンポジウム

- 福島正久、永井克孝、小林 正、鈴木修次、北澤高純、松村信治郎、井深淑子、朝倉孝吉、長松昭男、田端光美、鞍馬菊枝、小牧正道、筑波常治、村上陽一郎、岡本剛、小田切美文、近藤正夫、松尾登、松田武彦、片山清一、永井裕、長岩 寛、奥原唯弘、岡宏子、大河内正陽、米地 実、千葉正美、菊池百合、山口重克、西村敏男、福田敏一、尾崎 茂、玉川直重、築田長世、田中未来、中川一朗、松島 恵、中村 進、小池滋、三和 治、山本澄子、和田義信、木村一嘉、望月昭一、金丸重嶺、沖野安春、佐藤誠三郎、小竹豊治、厚東偉介、奥野忠一、岡村勝、井上 孝、千住鎮雄、山西 貞、坂田道太、新見 宏、松原治郎、田島恵児、川田雄一、内山尚三、吉田幸弘、若槻泰雄、鳥海俊宏、黒田道雄、吉松藤子、石川 馨、高島善哉、中村哲哉

# 第59回大学共同セミナー

主題↓心のなかの現代——社会心理学の話題をめぐって  
期日↓昭和48年7月6～8日

### (全体講義)

「おかしさ」の歴史

中央大学教授 世良正利氏

社会人としての生活

朝日新聞社出版企画室 竹内太郎氏

(セクシオン演習)

A 個性の強さ

国際基督教大学教授 星野 命氏

B 信頼と支持の獲得をめぐって

慶応義塾大学助教授 岩男寿美子氏

C 民俗への関心

中央大学教授 世良正利氏

D E・フロムにおける現代

法政大学教授 佐藤 毅氏

E 研究心と向学心

広島大学助教授 西山 啓氏

F 私的空間となわばり

聖心女子大助教授 竹村研一氏

G 無意識のマキャベリズム

東京工業大助教授 龜山貞登氏

(助言者)

岩手大学助教授 大沢 博氏

(セクシオン・アシスタント)

東京工業大学心理学研究室

大田敏澄氏

馬場道子氏

志村和子氏

(参加学生)

八九名(うち女子四八名)

早大(七)、岡山大(六)、一橋大

(六)、津田塾大(六)、慶大(五)、

東工大(五)、日女大(五)、お茶

の水女大(五)、中大(四)、東大

大(三)、ICU(三)、東工大

(三)、東大(二)、上智大(二)、

明学大(二)、専修大(二)、聖心

女大(二)、国士館大(二)、立大

(二)、武蔵野音大(二)、埼玉大

岐阜薬大、神奈川大、駒沢大、信

州大、明大、法大、外語大、都立

大、日大、東京家政大、成蹊大、

青学大、京都大、武蔵大各一名

(三五大学)

大学共同セミナーでは、第43回「人間解放——サイコパソロジー」の諸問題を隣接科学との関連を含めて取り扱っているが、今回は龜山先生を中心に、第43回セミナーの講師、また当ハウスとは共同セミナー委員などで関係の深い世良、佐藤、星野先生の参加も得て開催された。

このセミナーは、最近の社会心理学の話題を各講師がそれぞれの専門から提示したうえで、現代の社会生活で期待されている各人の役割を、各人が率直に検討し、人間の社会的な行動についての知見を切実な問題提起として話題として、多様な思考活動を激励した。

# 第60回大学共同セミナー

夏季長期セミナー……磯村教授全期間滞在

主題↓人間・都市・土地——人間にとって都市とは何か  
期日↓昭和48年8月9～12日

### (全体講義)

東洋大学前学長 磯村英一氏

(セクシオン演習)

A 大都市の成長過程と土地利用の変化

東京工業大助教授 熊田禎宣氏

B 人間と地域社会

東京都立大助教授 倉沢 進氏

C 地域社会計画——住民による調査と運動

東洋大学教授 藤本三千人氏

D 人間と都市

東京大学助教授 伊藤 滋氏

早稲田大学助教授 戸沼幸市氏

E 都市空間の価値と価格

建設省建築研究所建築経済研究室長 早川和男氏

(ゲスト講演)

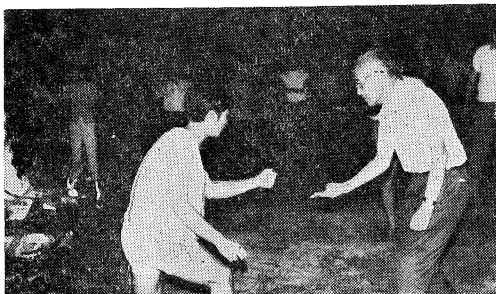
読売新聞解説部 本吉庸浩氏

(アシスタント・グループ)

はるばる岡山大学から参加した学生たちは、「自分らはこのセミナーが非常に刺激的であった。また、各大学の学生との交流の機会を作ってくれるこのような施設が完備している東京の学生が羨ましい」という感想を述べており、セミナー・ハウスの意義をあらためて認識するセミナーでもあった。

今回のセミナーは、この夏休みを利用して、「人間のつくった都市は何であったか、これからつくる都市はどうあるべきか」について、「地に着いた」議論を徹底的に行ないたいという趣旨のもとに磯村先生が企画された。まず、磯村先生は、都市行政に携わった経験を軸に現在の都市問題について

早大(八)、東洋大(六)、日大(五)、東大(五)、東工大(四)、一橋大(四)、津田塾大(三)、工学院大(三)、慶大(三)、都立大(二)、金城学院大(二)、東女大(二)、東京農大、お茶の水女大、同志社大、神奈川大、中大、千葉工大、関東学院大、法大、理科大、和光大、武蔵野美大、大阪大、横浜国大、埼玉大各一名(二六大学)

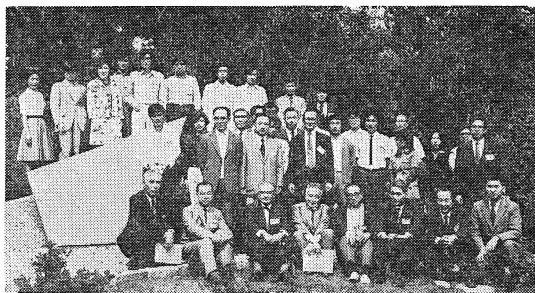


磯村先生も楽しく登場——キャンプファイヤー



全体討議——司会：龜山先生





〈シンポジウムと話題提供者〉  
A どのような物理学を高校で教

### 第61回大学共同セミナー

主題↓物理教育はいかにあるべきか

期日↓昭和48年9月21〜23日

講義され、また本吉先生は、ジャーナリズムは現在の土地問題をどう捉えているかについて講演された。セクションは、住民運動を含む都市社会学や建築、都市工学などから構成し、また関東大地震をテーマとして都市防災を訴えた映画「東京消失」を用いての討論会、多摩ニュータウンの見学、セミナー・ハウス近くの農家を訪ねて土地についての考えを聞くなど、立体的なプログラムを組み、

都市問題を実感としてとらえるよう工夫した。ただ一つ残念であったのは、地方大学からの参加者が少なかったということである。しかし、このセミナーは、学生有志のアシスタント・グループがキャンプファイヤーや全体討議の進行に当たるとの活躍があり、また、セミナー終了後も研究会をつづけているグループもあるなど、学生の活動が多くみられた。

和光大学助教授 藤井 清氏  
C 大学と高等学校の相互協力のあり方

慶応義塾大学講師 渡辺 彰氏  
上智大学講師 笠 耐氏  
戸山高校教諭 小田切理文氏  
〈参加者〉  
・学生(一〇名)  
上智大(三)、ICU(二)、慶大(二)、理科大、学芸大、立大各一名

・高校教員(七名)  
駒場東邦高、都立国立高、桐朋高、都立立川高、都立新宿高、明治学院高、聖ヨゼフ女子学園高各一名。

・大学教員(八名)  
東洋大、理科大、工学院大、北海道教育大、千葉大、上智大、青学大、共立女大各一名。  
・その他(三)  
NHK高校講座座担当者(三)。

えるべきか  
東京大学教授 石黒浩三氏  
赤城台高校教諭 丸丸章門氏  
慶応義塾高校教諭 渡辺 寧氏  
白鷗高校教諭 岡崎 正氏  
B 大学における物理教育はどうあるべきか  
東京大学名誉教授 山内恭彦氏  
上智大学教授 鈴木 皇氏  
学習院大学教授 近藤正史氏  
東京理科大学教授 戸川孝夫氏  
東京大学助教授 村上陽一郎氏

●大学と高校を結ぶ  
新形式のセミナー  
【主題の主旨】  
多くの高等学校の物理の先生は「大学の入試のために物理教育が偏向せざるをえない」と考えておられ、一方大学で物理教育にたず

さわる人々の多くは「高等学校の物理教育のひずみを取り去るのはひじょうに困難なことである」と考えている。いいかえればそれだけの教育者はこの件に関して相互に不信感を抱いていると思われる。今回のセミナーでは両方の立場の当事者でいろいろな考え方を

### 寄付金報告

(昭和48年7月〜9月)

ご支援を感謝して拝受いたしました。

寄付者ご芳名

三、〇〇〇円

明治学院大学教授 大島貞夫殿

三、〇〇〇円

日本基督教団国立教会聖歌隊殿

三、〇〇〇円

東京外国語大学 中嶋ゼミ殿

九、〇〇〇円

堀之内町会体力づくり会殿

絹ヶ丘子供会(会長石塚勤)殿

高嶺団地子供会育成会殿

森永牛乳由木配給所殿

二、〇〇〇円

東京工業大学社会工学科

熊田禎宣殿

石井 望殿

一〇、〇〇〇円

東映生田スタジオ 大竹昭男殿

五、〇〇〇円

Pプロダクション 設楽正之殿

五、〇〇〇円

佛天象儀館殿

一〇、〇〇〇円

佛八王子大丸

五、〇〇〇円

取締役社長 柴田進二殿

### 《植樹基金》

一、〇〇〇円

第59回大学共同セミナー参加者

八、一四円

第59回大学共同セミナー殿

二、一〇〇円

立教大学三戸ゼミナール殿

一六、三七八円

大川ゼミナール殿

五、五〇〇円

第60回大学共同セミナー殿

九、六九〇円

母と子の教室幹事金山千代子殿

六、〇〇〇円(チャボヒバ二本)

第61回大学共同セミナー殿

〇、〇〇〇円

大学英語教育学会第七回夏期

セミナー参加者一同殿

《現物寄付》

幔幕紅白二枚(二〇、〇〇〇円)

日米学生会議事務局殿

紳士傘一〇〇本

佛八王子大丸

取締役社長 柴田進二殿

佛八王子大丸

取締役社長 柴田進二殿

取締役社長 柴田進二殿

取締役社長 柴田進二殿

取締役社長 柴田進二殿

取締役社長 柴田進二殿

取締役社長 柴田進二殿

取締役社長 柴田進二殿

取締役社長 柴田進二殿

### ◆大学共同セミナー

第63回II日本文学の新しい研究法

第64回II新時代を迎える国連

第65回II言葉と文化

### セミナー開催予告

昭和48年12月14日〜16日

昭和49年1月11日〜13日

昭和49年1月11日〜13日

2月15日〜17日

# 業務通信



名の利用者であった。一〇月以降は企業研修の申込みが殺到しているがハウス本来の意味から学生優先を考えているので、断わるのに苦慮している状態である。学生・学会・教育団体の利用増を切に願っている。

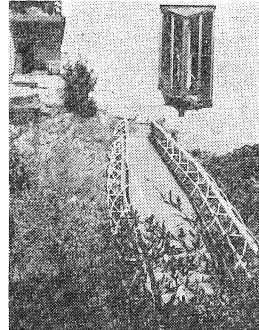
六月に入ると、一日から五日までの間、東京理科大学の各グループが一三〇〜一四〇名の単位で毎日利用した。六月は施設整備のため一日から二日まで休館したが、それでも三、二二二人の利用者があった。

七月の特徴は二〇名以下のゼミナールの小グループが頻繁に利用したことである。このためフロントは多忙を極めたが、三、三二八名と嬉しい悲鳴でもあった。

八月は、夏休み中でもあるので利用者はさらに上昇、学会、日米学生会議、東南アジアの学生、ELC語学教育振興会等を加えて四、四五四名の利用者を迎えた。

一橋大学が夏季学外ゼミナールとして六回の連続ゼミを九月初旬に実施した。また、津田塾大学、青山学院大学は七月学期末とあつて、八、九月はゼミナール室を間断なく利用した。

夏場が過ぎ九月になると若干利用率が減るが、本年も三、五八二



## 利用状況



### ◆六月

東京理科大学教授 西田正孝  
東京都立大学教授 辻正三  
日本ワールドフレンジシッパアン  
シエーション

東京理科大学教授 目黒謙次郎  
東京都立大学教授 三井為友  
東京理科大学教授 今村喜夫  
青山学院大学教授 国岡昭夫  
中央大学講師 木下徳明  
東京理科大学教授 鈴木良治  
JIBP門司研修会  
東京理科大学教授 安達忠次  
立教大学教授 柳原光

東京学芸大学教授 石渡毅  
東京理科大学教授 米田登  
東京工業大学教授 松田武彦  
東洋大学教授 泉 裕典  
東京学芸大学 鈴木甚五郎  
東京都立大学教授 林 栄夫  
東京都立大学教授 小林激郎  
日本女子大学付属高等学校

上智大学教授 田中仁彦  
日本福祉大学教授 堀江正規  
東京都立大学教授 江藤价泰  
東洋大学講師 松本恒之  
慶応義塾大学教授 小茂鳥和生  
立正大学教授 田原敏弘  
東京理科大学教授 大河原春雄  
スリーポンド(株)

文部省大学学術局 朝倉孝吉  
成蹊大学教授 武田清子殿  
日本YMCA同盟 成蹊学園殿  
早稲田大学教授 古川 光  
明治学院大学教授 大井上滋  
明治大学教授 内田章五  
慶応義塾大学教授 白井 厚  
モラロジー豊島事務所 藤林宏一  
第8回大学教員懇談会  
東京理科大学助教授  
第58回大学共同セミナー  
東洋大学 和宗宗人  
上智大学助教授 安西徹雄  
玉川大学助教授 彦由一太  
東京学芸大学教授 角尾 稔  
東京都立大学教授 関口 晃  
日本印刷技術協会 中市良平  
明治学院大学助教授 島山龍郎  
立教大学教授 本間康平  
新生活運動協会  
横河ヒューレットパッカーD(株)

### ● 寄贈図書 (昭和48年7月~9月)

「経済と社会」「社会学論叢」55・57号、「社会問題」33号 笠原正成殿  
「紀要」38集、別冊「ソヴェット高等教育に関する資料」 国立教育研究所殿  
「ヨーロッパ歴史紀行」 堀米庸三殿  
「The World Book Encyclopedia」, "Sounds from Word Book", "Field's Travel Advisor" 早稲田大学総長室広報課殿  
Educational Corporation 殿  
「背教者の系譜」 武田清子殿  
「成蹊学園六十年史」 成蹊学園殿  
"Asian Culture" no. 4 ユネスコアジア文化センター殿  
「教育不在」 森戸辰男殿  
「大学教育の変革」 里見昭二郎殿  
「大学の理念と実践」 東海大学学生生活研究所殿  
「大学の原点」 長島 正殿

「民族と階級」 高島善哉殿  
「日本の資源問題」 板垣與一殿  
「革命思想と実存哲学」 武藤光朗殿  
「第四の人間と福音」 新見 宏殿  
「私企業の将来」 「生活者の行動科学」 名東孝二殿  
「中国を見つめて」 「現代中国論」 中嶋嶺雄殿  
「中国像の検証」  
「大学問題論叢」

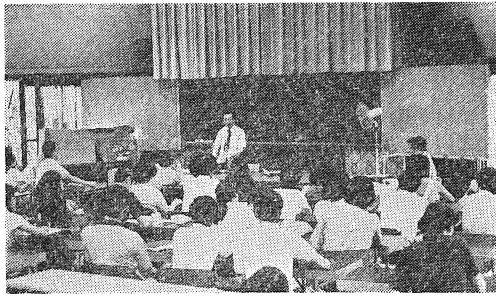
「Energy」 no. 36 エッソ・スタンダード広報課殿  
「空間価値論」 早川和男殿  
「宇津木遺跡とその周辺」 八王子市教育委員会殿  
「税法判例研究」 北野弘久殿  
「世界の名著」 65 中央公論社殿  
「桑都日記」 鈴木龍二記念刊行会殿

総合経営能率協会  
会員校事務連絡会  
共同セミナー委員会 川原栄峰  
お茶の水女子大学教授 太田次郎  
明治大学教授 高木亀一  
お茶の水女子大学教授 太田次郎  
東京慈恵会医科大講師 能谷公明

◆七月  
大学連合 サンライズインターナ  
慶応義塾大学教授 小竹豊治

シヨナルクラブ  
東洋大学助教授 丸山久美子  
法政大学学友会技術連盟  
慶応義塾大学教育学演習 鶴田忠彦  
東京都立大学助教授 遅塚忠躬  
東京都立大学助教授 北垣信行  
東京家政大学担任研究会  
東京都立大学教授 野崎 孝  
慶応義塾大学教授





江藤淳氏を迎えて—日米学生会議

- 第59回大学共同セミナー
- 東京都立大学教授 佐藤英男
- 日本大学助教授 関沢勝一
- 東京大学助教授 山下肇
- 東京慈恵会医科大学教授 野本浩智
- 東京都立大学司法問題研究会 野町二
- 学習院大学教授 林俊一
- 独協大学教授 河土睦子
- 東京大学実験心理学C班 お茶の水女子大学助手 椋川一朗
- 東京都立大学助教授 慶応義塾大学助教授 山田辰雄
- 東京理科大学助教授 木村一嘉
- (財)日本聖書協会 吉原 功
- 明治学院大学講師 中山 昌
- 目白学園女子短期大学 木村彰一
- 大学英語教育学会夏期セミナー 大塩俊介
- 東京大学教授 大塩俊介

- 明治学院大学講師 吉野 一
- 東京経済大学教授 内田星美
- 早稲田大学教授 川原栄隆
- 明治学院大学教授 神保信一
- 東京大学物性研究所 L E E D 研究グループ 大島貞夫
- 明治学院大学教授 三戸 公
- 立教大学教授 鶴見和子
- 上智大学教授 木原太郎
- 東京大学教授 一丸節夫
- // 助教授 片山暁子
- 国立音楽大学講師 石谷 行
- 法政大学助教授 石谷 行
- 明治学院東村山高校夏期学習強化 合宿 荒井 基
- 日本女子大学助教授 浅枝 陽
- 学習院大学助教授 小西六写真工業(株)新製品開発セミナー 本間 遜
- 東京大学教授 武藤俊之助
- 日本大学教授 原 純子
- 日本女子経済短期大学 国際学生協会会員セミナー 三橋文明
- 中央大学教授 関根智明
- 慶応義塾大学助教授 後藤祥子
- 日本女子大学講師 文部省特定研究「環境汚染制御」 市川 博
- 横浜国立大学助教授 日本基督教団国立教会 スリーポンド(株) 中村竜雄
- 学習院大学講師 中央大学教授 小川浩八郎
- 中央大学助教授 松原治郎
- 中央大学教授 伊藤成彦
- 武蔵工業大学教授 岡本定次
- 東京Y W C A 学院秘書養成科 シニアコース

- 東京理科大学教授 荻野圭三
- 日本電気(株)情報システム 共立女子短期大学教授 青山誠子
- 日本大学講師 中込賢明
- 大学連合後藤ゼミナール 愛知教育大学 木下光一
- 東京学芸大学 朝日新聞社 丸山慶子
- 白百合女子大学助教授 丸山慶子
- 朝日新聞社 丸山慶子
- 東京大学助教授 丸山慶子
- 琉球大学 望月清司
- 専修大学 望月清司
- ◆八月
- (財)国際教育振興会日米学生会議 津田塾大学影絵研究会 一橋大学アイゼック 東京外語大学助教授 中嶋嶺雄
- 慶応義塾大学助手 青池慎一
- 武蔵工業大学都市計画ゼミ 松井英男
- 杏林大学教授 熊谷 孝
- 明治大学中国研究会 文学教育者研究集団 伊丹邦夫
- 東京理科大学教授 東京学生協会 大谷慎之介
- 東洋大学助教授 明治大学職員 薄井昭七
- 早稲田・日本女子大学講師 朝倉征夫
- 第60回大学共同セミナー 日本科学技術翻訳協会教授 蓮沼正利
- 早稲田大学助教授 早稲田大学教授 公文俊平
- 日本基督教団小金井教会 大槻 健
- 早稲田大学

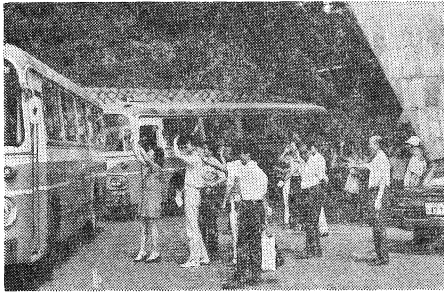
- 明治学院大学助教授 高野史郎
- 工業地理学研究会 小西六写真工業新製品開発ゼミ
- 国立特殊教育総合研究所夏季補聴研究会 研究會
- 東京教育大学大学院ゼミ 日本女子大学助教授 一番ヶ瀬康子
- 日本大学助教授 関沢勝一
- 松本享英語学校 共立女子中学校 加藤 寛
- 慶応義塾大学助教授 上野健爾
- 東京大学助手 長名寛明
- 慶応義塾大学助教授 教育計画会議(研究会) 東京観光専門学院E S S 夏期合宿
- 法政大学経済学研究会 生活の発見会 北辰電機製作所(株)B B C 研修 中和印刷(株)社員研修
- (財)英語教育協議会 住友スリーエム(株) 村田経和
- 学習院大学教授 さくらカラー販売(株)社員研修會 東京教育大学ハチコン 徳末安伊子
- 日本女子大学助教授 小川 仁
- 東京学芸大学助教授 安井 郁
- 法政大学助教授 福井芳男
- (財)語学教育振興會東京大学助教授 杉山 好
- 独協大学講師 白梅学園短期大学教授 田中未未
- 上智大学教授 E・ベレス
- グリーン英会話学院教育セミナー 小西 悟
- 東京都立大学助教授 野田春彦
- 東京大学助教授 六戸 寛
- 学習院大学講師 薄井昭七
- 明治大学職員

- 東京学芸大学助手 池田義人
- 八王子市教育委員会教育研究所 永野 賢
- 東京学芸大学助教授 田村俊和
- 東京大学助教授 長尾龍一
- スリーポンド(株)(社内研修) 森久保良子
- 東洋女子短期大学学生 吉野陽一
- 上智大学助教授 小田中敏男
- 日本大学講師 近藤薫樹
- 日本医科大学 飯島宗亭
- 東洋大学 三橋文明
- 中央大学助教授 立教大学講師 定形日佐雄
- 東京女子大学英米文学科ゼミ 富士電機労働組合東京支部 玉野井昌夫
- 学習院大学助教授 桐谷 維
- 東京都立大学助教授 榑原敏房
- 日本大学助教授 斎藤 稔
- 法政大学助教授 京都市ノートルダム女子大学 松本佳子
- 九紅(株) 田辺知之
- Y W C A 学院 富田幸子



- 司法研修所 鮎沢多俊
- 東京大学講師 鈴木達男
- お茶の水女子大学教授 茅野良男
- 明治学院大学教授 神保信一
- 実践女子大学 古屋和江
- カリタス女子高等学校 関口詔子
- 慶応義塾大学 島袋光弘
- ◆九月
- コルゲート大学(日本語ゼミ) 大谷禎之介
- 東洋大学助教 大谷禎之介
- 東京武蔵野Y.M.C.A (青少年プログラム専門委員会)
- 明治学院大学助教 高野史郎
- 東京都立大学助教 速水佑二郎
- 立正大学助教 中村孝之
- 上智大学助教 吉田 裕
- 一橋大学助教 深沢 宏
- (財)語学教育振興会ITC仏語科ゼミ
- 一橋大学助教 竹内啓一
- 東京都立大学助教 稲垣 寛
- 一橋大学講師 依光正哲
- 明治学院大学講師 橋本敏雄
- 二松学舎大学助教 佐古純一郎
- 東京大学助教 広部達也
- 早稲田大学助教 加藤栄一
- A・D・O本部スクーリング
- 聖心女子大学講師 鈴木秀子
- スリーポンド(株)女子社員研修
- 国際基督教大学アジア研究会
- 明治学院大学助教 原田勝弘
- 一橋大学助教 岡山誠司
- 東京経済大学助教 大谷喜明
- 横浜国立大学助教 依田 明
- 富士電機労働組合東京支部
- 一橋大学助教 好美清光

- 一橋大学教授 山川喜久男
- お茶の水女子大学加藤グループ
- 慶応義塾大学助教 松谷昭彦
- 日本大学助教 関沢勝一
- 東京都公立保育研究会 斉藤 真
- 東京大学教授 岡本康雄
- お茶の水女子大学新入生セミナー
- 東京大学教授 岡本康雄
- いのちの教会研修会 塚田 理
- 立教大学教授
- 一橋大学教授 谷美奈子
- 東京都立大学助教 鴛田忠彦
- 慶応義塾大学講師 本吉修二
- 早稲田大学助教 松原 昭
- 一橋大学助教 富沢賢治
- 日本キリスト教団中渋谷教会
- 上智大学文学部新聞学科人間学合宿
- 日本大学大学院セミナー
- 日本民間放送労働組合連合会
- 中央大学講師 木下徳明
- 日本電気(株)情報処理 営業支援本部



See you again……

- 東京工業大学助教 森田矢次郎
- 東京理科大学教授 増山元三郎
- 日本大学駿河台病院
- スリーポンド(株)社員教育
- 中央大学教授 山下幸夫
- 第61回大学共同セミナー
- 法政大学経済学研究会
- タックスクラブ
- 慶応義塾大学教授 澤本孝久
- 日本福祉大学教授 浦辺 史
- 東京外国語大学教授 長谷川寛
- 早稲田大学講師 北野弘久
- サマリヤ伝道隊
- 八王子大丸(株)社員研修
- 明治学院大学教授 竹内真一
- 和光大学子供問題研究会
- キリスト教経済懇談会C・E・C
- 津田塾大学教授 大東百合子
- 法政大学助教 坂口 康
- 工学院大学教授 波多江健郎
- 国際ナビゲーター
- クリスチャングループ研修会
- 聖母女子短期大学静修会
- 小西写真工業(株)研修会
- デイ・ケイ・シー(株)社員研修
- 成蹊大学教授 武田昌輔
- 津田塾大学教授 高見幸郎
- 津田塾大学教授 許 世楷
- 法政大学助教 花香 実
- 東京都立大学教授 鈴木二郎
- 白梅学園短期大学教授 井手則雄
- 富士電機製造(株)東京工場
- 東京都立大学日本語学演習
- 拓殖大学助教 広瀬一彦
- 東京慈恵会医科大学 木戸義行
- 東洋大学教授 今井光太郎

専務理事ノート

時が来たのである。アジア財団日本代表スチュアート氏の親切な取計いでアメリカ大学視察旅行が実現し、一〇月一五日から一二月一〇日まで約三〇校近い大学を訪れることになる。

私が若い頃、大いに興味を持ったのは、アメリカの建国と清教徒、新島襄、内村鑑三の若い霊を育てたニューイングランド、独立戦争と南北戦争の故地、若き日の新渡戸稲造の心をつかまえたクエーカーのフィラデルフィアであった。私は同志社人でもあり、クエーカーの信仰者でもあるので、もしも同志社の教師であつたら、または太平洋戦争でもなかつたら、私にもアメリカ遊学の機会があつたであろうが、運命はそのように転回しなかつた。

旧友と語り、新しい友をつくり、国際交流の道を開いて帰りに訪れる酒客であろうか。

ニューヨークのハミルトンにあるコルゲート大学がセミナー・ハウスの国際会員校になるほど、われわれは国際化の時代に住んでいる。セミナー・ハウスの客となった欧米の大学人も多いのである。個人的にはなんといってもクエーカーの開いたフィラデルフィア、インディアナを訪ね、ペンデルヒル、アーラム両大学やエスター

ローズ、ゴルドン・ポールス両家の客となること、新島襄のアーモスト大学でしみじみと伝記の中のこの人に出会うこと、ハーヴァード、プリンストンのごとき一流大学の現状をさぐったり、ライシャワー博士家の客となつてよもやまを語ることなどが期待される旅の楽しさである。

一九六九年西部を旅行したとき私は大きな忘れものをしてしまった。今度はぜひともスタンフォードのシンク・タンクといわれるピヘビオラル・サイエンスを視察しなければならぬ。世界の学者が集まっているセミナー・ハウスのようなものであるらしいから。

多摩の民家が来年はこの丘に移築復元されるであろうが、私にとってその費用一五〇〇万円をつくらなければならない。勉強に、囲碁に、酒宴に、茶席に、句吟に、談話にもってこいの民家である。早くも山内恭彦博士はこの家に「遠来荘」と命名して下さつた。おそらく博士は最初に訪れる酒客であろうか。

理事長の加藤六美、武蔵大学長正田建二郎両先生は著名な陶工だから茶器も酒器も名品が揃うであろう。趣味人のご協力を願つて、遠来荘の品々を整えたい。春は結城、秋は大島というから、私も秋の開荘までに大島をつくらねばなるまい。私が和服を着るといふのも、日本人の再発見なのかもしれない。これは楽しい課題である。

これは楽しい課題である。